エントランスで宿泊客を迎えるのは、デイル・チフーリのダイナミックなガラス作品。

ホテルロイヤルクラシック大阪

関西初のHOTEL & MUSEUM

大阪を代表する繁華街、難波の御堂筋沿いに、かつて大阪新歌舞伎座（1958年竣工）という劇場があった。高いビルに囲まれた6階建の劇場は目立つサイズではないものの、寄棟の大屋根と連続する唐破風の庇を組み合わせた外観で多くの注目を集め、その偉容から多くの人々に愛されてきた。だが、時代の流れには抗えず、2009年には惜しまれつつ姿を消すことになる。

その大阪新歌舞伎座跡地に2019年12月1日、新しい建物が誕生した。設計は、新国立競技場などで知られる隈研吾。彼は銀座にある現在の歌舞伎座も手掛けており、歌舞伎のための劇場の機能を保ちつつオフィスビルを融合させた。一方、大阪ではかつての劇場の顔であった連続唐破風のデザインを踏襲しながら、結婚式場を併設したホテルへと生まれ変わらせたのだ。そこには新歌舞伎座の設計者である村野藤吾という昭和の名建築家の精神が息づいている。

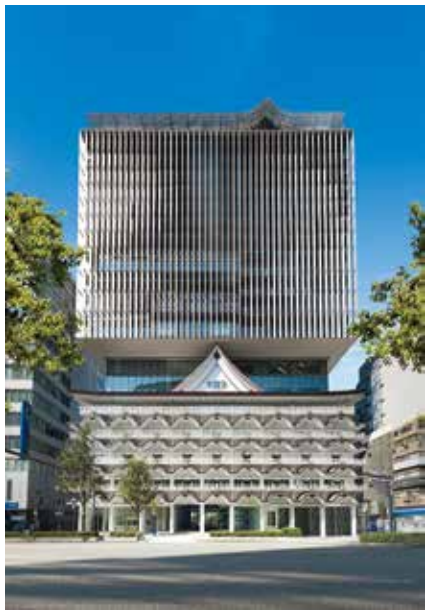
地上20階、地下1階建のホテルロイヤルクラシック大阪。150の客室のほか、レストランやラウンジ、6つのバンケットルーム、さらにブライダルに対応した2つのチャペルやフォトスタジオ、ブライダルサロンなどを備えており、外観・内観ともに隈研吾建築らしく、伝統と革新が高いレベルで融合している。

このホテルの誕生に関わった人々には「難波、そして大阪の新しい文化を発信する拠点にしたい」という想いがあった。そこでコンセプトとして定められたのが〝ミュージアムホテル〟。美術評論家の伊東順二と銀座の画廊ホワイトストーンギャラリーの監修のもと、ホテルとしては前例のない100点を超えるアート作品を取り入れることになった。つまりここは、ホテルでもあり、ミュージアムでもあるのだ。

コレクションは3つの要素から構成されている。一番目は、1954年に関西で生まれ、世界で認められた具体美術の作品群（白髪一雄、元永定正、上前智祐など）。解散から50年近く経つが、2013年ニューヨークのグッゲンハイム美術館で回顧展「具体：素晴らしい遊び場」が開催されるなど、21世紀に入ってもその人気は益々上昇している。二番目の要素は、現代美術作品群。靉嘔、小松美羽などすでに国際的評価の高い作家に加え、石村大地や佐藤果林などこれからの活躍が期待できる若手作家の作品にも注目したい。第三の核となるのは、ガラスによる作品群。時代とともに多様な表現を生み出してきたこの素材を使った作家の代表格が、デイル・チフーリだ。さらにかつての大阪新歌舞伎座の建物を飾っていた美術品や工芸品もホテルにさりげなく飾られている。

2

1



3

1.2階のレストラン「ユラユラ」に置かれた石村大地の《自刻像〜好きを集める〜》は、ここを訪れる子どもたちにも人気が高い。
2.ホテル内はサインなど細部に至るまで隈研吾建築都市設計事務所が手がけており、随所に木の温もりが感じられる。
3.建物の6階部分までは、大阪新歌舞伎座の意匠を継承しつつ、高層部はアルミルーバーを重ねた繊細かつダイナミックなデザイン。まさに伝統と革新が調和した、隈研吾らしい設計だ。

Hotel Royal Classic Osaka